様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３７１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１０５６

研究課題名（和文）17世紀ドイツ語圏の日本人描写と「宗派化」―修道会間の相違に注目して

研究課題名（英文）The depiction of Japanese and Confessionalization in the German-speaking Area during the 17th Century

研究代表者
大場　はるか（Oba, Haruka）

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：４０７５８６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：2018年度はベネディクト会の日本人描写の調査をウィーンなどで行った。2019年度は6月に二国間交流事業の支援を追加で受け、京都でオーストリアの研究者と国際セミナーを実施し、近世ドイツ語圏の日本観とトルコ観について比較した。2019年夏にはチューリヒなどの図書館に加え、ゾーロトゥルンなど各地の教会を訪問して調査を実施し、2019年秋にはノルウェー科学技術大学の研究者と宗教関連のマテリアルカルチャーに関するワークショップを開催した。2020年度は新型コロナウィルス拡大のため研究が妨げられたが、全体としては以上の研究により、ベネディクト会劇とイエズス会劇の世界観の相違が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまでの研究が日本と直接的な関係があったポルトガルやスペイン、オランダの日本情報に注目してきたのに対し、ドイツ語圏という欧州内陸部の日本情報に注目しているところにある。ドイツ語圏のような内陸部では、日本情報が現地の諸状況によって強く脚色されていった。このプロセスを明らかにしていくことは、「異文化」に対するものの見方が時に「母国」の諸状況に左右されるプロセスを明らかにすることでもある。このため、この種の研究が注意喚起していることは、異文化理解が重視されている現代の国際化社会でも重要な意味を持つ。

研究成果の概要（英文）：In 2018, I conducted a survey of Japanese depictions in Benedictine School Plays in Vienna etc. In 2019, with the additional support of the Joint Project (seminar) of JSPS, an international seminar was held with Austrian researchers in Kyoto to consider the depiction of Japanese and Turks in the Early Modern German-speaking countries from a comparative perspective. In the summer of 2019, I visited churches in Solothurn etc. to collect historical materials in addition to the Library in Zurich etc. and conducted my research. In the fall of 2019, I joined in the international workshop about the relisious material culture held by the researchers of the Norwegian University of Science and Technology (NTNU) in Trondheim. In 2020, because of the spread of the Covid-19, the research was significantly hindered. However, as a whole, the above research went well and cleared that the difference between the depictions of Japanese in the Benedictine drama and the Jesuit drama was cleared.

研究分野：西洋史学

キーワード：神聖ローマ帝国　日本観　イエズス会　ベネディクト会　キリシタン　学院劇　宗派化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、近世ドイツ語圏の日本観と「宗派化」――教会と国家によって支配領域の宗派的統一性（均質性）を確立するために進められた運動――との関係を探究する予定であった。「宗派化」に関する研究は、1980 年代からドイツ語圏で興隆していた。この概念に対しては、イタリアやスイスの事例から反論が出されており、神聖ローマ帝国内部にも宗派化が見られない地域があることが近年証明されている。しかし、「宗派化」は今なお近世ドイツ語圏を考察する際に重要な「作業概念」とみなされ、国際学会でも言及されているため【Brockmann, T. u.a. (hrsg.) Das Konfessionalisierungsparadigma, 2013】、本研究はこの用語を使用することにした。

先行研究を調べたところ、宗派化に関する研究は、カトリック内部の多様性にはあまり踏みこんでいないことがわかった。また、芸術関連の事象――特に演劇――と宗派化との関係も不明なままであった【踊共二「宗派化論：ヨーロッパ近世史のキーコンセプト」(『武蔵大学人文学会雑誌』第 42 巻第 3・4 号、2011 年）109～158 頁】。この状況をふまえ、本研究はカトリック側の世界観の多様性を芸術関連の事象、特にベネディクト会劇に注目して検証することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、カトリック側の世界観の多様性を芸術関連の事象に注目して検証し、これを通して「宗派化」を見直し、新たな観点から近世の世界観と宗派との関係を見直すことであった。この目的の下、本研究は、異なる世界観が同一宗派内の様々な集団においてどのように生み出され得たのかを問うた。ペーター・ブルシェルは「他者の表現形式と認識形式の宗派化」に言及し、異文化の描写が宗派に左右されたことに注意を喚起している【Burschel, P.: Sterben und Unsterblichkeit, 2004, S. 230】。しかし、日本人描写が宗派よりむしろ修道会に左右された事例も確認されている。このため、本研究ではイエズス会とベネディクト会の日本観の比較を通し、カトリック内部の世界観の複数性に注意を喚起し、宗派化を相対化することを目指した。

３．研究の方法

イエズス会とベネディクト会の世界観の比較のところで、本研究は臣民の信仰強化と規律化および少年のラテン語能力強化のところで重要な役割を果たした両修道会の学院劇に注目した。この学院劇の日本人描写は質量ともに際立っているが、歴史学では全く考察されていない。しかし、この劇が教育、規律化、芸術と密接に関係していたことを考えると、劇の日本人描写の検証は宗派化の見直しに不可欠と言える。修道会に関しては世界的にイエズス会に関する研究が圧倒的に多く、日本ではベネディクト会に関する包括的な研究が皆無である。本研究はこの先行研究の不足部分の補填にも副次的に寄与するため、特にベネディクト会の学院劇を重点的に扱った。

近世の世論形成やコミュニケーションを扱った先行研究は、手書きの新聞やビラなど近代の新聞の前身とみなされるメディアを主な分析対象としてきた。これはユルゲン・ハーバーマスが近代の世論形成を新聞との関係で語り、彼の見解が歴史学にも影響を与えたためである。これに対し、本研究は新たに修道会の学院劇などもメディアとみなして分析に加え、日本観の形成プロセスをより包括的に検証した。日本観の相違を修道会との関係で明らかにし、カトリック内部の複数性に注意を喚起しつつ宗派化の相対化を目指すという本研究の方法論と、これを通して近世の世界観と宗派との関係を新たな観点から見直すという本研究の目的は、国内外で類がない。

申請者は 2012 年より、ドイツ語圏南部のイエズス会が上演した学院劇の日本人描写については既に分析してきていた。この分析結果をベースに、本研究では、①修復作業のため以前に閲覧できなかったゾーロトゥルン（スイス）のイエズス会の学院劇に関する史料調査、②司教領ザルツブルクのベネディクト会の学院劇に関する史料調査、さらに、③新たに確認された、ドイツのアイヒシュテットとインゴルシュタットに残されているイエズス会関連の造形芸術の調査を主に行った。ザルツブルクはアルプス以北では最有力の聖職領の一つであったため、現地に多くの史料が良い状態で残されていた。したがってベネディクト会の最初の分析対象として最適であった。以上をふまえ、④新たな調査結果と過去の研究成果を結び合わせ、両修道会の学院劇の日本人描写の相違点・類似点と、その形成過程・形成目的について考察した。

４．研究成果

本研究の成果としては、複数の点があげられる。これらの成果は、以下の部分でいくつかに区分して提示しておきたい。

(1) 研究内容に関する成果

調査の結果、ベネディクト会劇とイエズス会劇では全く日本人の描写の仕方が異なっている

ことがわかった。ベネディクト会劇の方は、どの登場人物が史実の中のどの日本人なのか特定できないケースがほとんどであった。これに対し、イエズス会劇の方は、多くの登場人物が史実の中のどの日本人であったのか、特定することが可能であった。この相違は、日本で宣教に携わったイエズス会士たちがヨーロッパに送った書簡や報告書が劇の構想のベースになっているためと考えられる。イエズス会はイエズス会の活動を宣伝する目的で劇を上演していたため、イエズス会士が書き送った書簡や報告書をある程度正確に追う形で劇を構想していたのであろう。ベネディクト会とは異なり、イエズス会は海外に宣教に赴く司祭の養成を目的として劇を上演していた部分もあるため、より「リアル」な劇が上演されていたと考えられる。一方、ベネディクト会の方は、カトリック教会の普遍性を描写するために、ところどころ日本人を改宗したアジア人の一例として劇に登場させていたようだ。結論として、イエズス会の方がベネディクト会よりも密に学院の教育と劇上演を関連付けていたと考えられる。ベネディクト会における「他者」の描写はカトリック的であったが、イエズス会における「他者」の描写はカトリック的というより、イエズス会的であったと言えそうだ。

(2) 新たな史料および研究材料の確認

本研究を進める中で訪れたドイツ語圏の図書館、文書館、教会、修道院では日本関係の史料を新たに確認することができた。ザルツブルク大学附属図書館で日本関係のベネディクト会劇に関するパンフレットを 3 部特定できたことに加え、スイスのゾーロトゥルンの教会に残されている日本人殉教者の絵画、同教会の聖体顕示台につけられた日本人殉教者のメダル、ドイツのアイヒシュテットの教会に残されている日本人殉教者の絵画、ドイツのインゴルシュタットの教会付属博物館に残された日本のキリシタンの聖遺物などが新たに確認できた。ほかにも、マールブルク大学の写真アーカイブ、ローマのヘルトツィアーナ図書館のデジタルデータ、ニュルンベルクのゲルマン国立博物館、ウィーンのアルベルティーナ美術館のデジタルデータなどを通し、複数の日本関係の史料が確認できた。

このほか、研究を進める中で、およそ 10 年前から行方不明になっていたトーマス・イムモースとマルグレット・ディートリヒの遺稿と収集物を偶然みつけることができた。両者は日本関係のイエズス会劇の研究者で 21 世紀初頭に続けて亡くなったが、さまざまな史料を集め、著書や刊行史料の出版を予定していたことが知られている。彼らの遺稿と収集物がみつかったことで、今後の研究の展望がひらけたのは幸いであった。

(3) 国際学術交流の発展、国際共同研究の企画

本研究の途中で、近世ドイツ語圏の日本人描写が同地域のトルコ人描写の影響を受けている可能性が考えられるようになったため、この研究と並行して日本学術振興会の二国間交流事業（セミナー）にオーストリアの研究者たちと共同で申請した。これが採択されたため、2019 年 5 月末～6 月初旬にかけて、京都で近世ドイツ語圏の日本観とトルコ観の比較をテーマにした国際セミナーを開催した。このセミナーを通し、近世ドイツ語圏の日本人描写についてより多角的な研究が可能であることがわかったため、セミナーに参加した関係者と将来的に国際共同研究を実施する話を始めることができた。この企画との関係で、申請者は 2021 年 4 月に新たな基盤研究 C を獲得し、この研究を開始している。

このほか、近年「マテリアル・カルチャー」に関する歴史学研究が増加していることもあり、ノルウェーのトロンハイム大学で近世のイタリアやドイツ語圏について教鞭をとっているブリッタ・ケーグラーが 2019 年 11 月にノルウェーで主催したマテリアル・カルチャーの国際ワークショップに参加することができた。このワークショップでは、日本人を描写した造形芸術や日本関係の学院劇の中で使われた小道具などを紹介し、これらが当時の社会の中で宗教的にどのように機能していたのかについて考察を深めることができた。また、ケーグラー教授とこの方向性の国際共同研究の企画も進め始めることができた。もっともこの企画は、彼女が 2020 年にドイツのパッサウ大学の教授職を得て異動になったことに加え、新型コロナウィルスが拡大したこともあり、現在は中断している。今後の再開を期待したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 大場はるか
２．発表標題 The Depiction of Japanese Villains in Jesuit Drama
３．学会等名 Japan and the Ottoman Empire in the Eye of the European Beholder - A Comparison（ヨーロッパ人の目から見た日本とオスマン帝国：ドイツ語圏における比較）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大場はるか
２．発表標題 Objekte des Barocken Schuldramas
３．学会等名 Materiality in Early Modern Europe, 16th-19th century.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大場はるか
２．発表標題 17・18世紀の中欧における日本人殉教者の造形芸術：ドイツ語圏南部からボヘミアへ？
３．学会等名 第71回日本西洋史学会（小シンポジウムII：信仰の世界地図―長崎26聖人信仰の視覚化とその伝播をめぐって，代表：小俣ラポー日登美）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大場はるか
２．発表標題 The friendship between St. Francis Xavier and Sorin Otomo depicted in Dramas and Arts in the Southern German-speaking Area.
３．学会等名 400. Jubiläum der Heiligsprechung von Ignatius und Franz Xaver und 250. Todestag von P. Martin Schmid SJ（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

関連して実施した国際共同研究（二国間交流事業の共同研究とセミナー）に関する報告は、下記の通り： H-Soz-Kult https://www.hsozkult.de/conferencereport/id/tagungsberichte-8400 LBI Innsbruck https://neolatin.lbg.ac.at/past-conferences/japan-jesuit-stage

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストリア	オーストリア科学アカデミー			
オーストリア	ルートヴィヒ・ボルツマン新ラテン語研究所			